

報国隊、挺身隊勤務と北条鉄道列車事故のこと

高見喜代子（当時、加西市在住 昭和3年生まれ）

昭和12年7月中頃、私は小学4年生。夜外音楽会が開かれ、父母たちが小学校の運動場に音楽を聴きに来られた。私もその時、4、5人と一緒に歌った歌を思い出す。

「瑠璃色の 海の向こうの大空に 今日も沸き立つ 白い雲
あの雲こえて 海こえて 私の鳩よ 飛んでゆけ」

（※おそらく、「夏の雲」作詞：相馬御風 作曲：中山晋平）

音楽会の途中に、校長先生が舞台上に上がり何か言っておられる。皆ざわめき始め、音楽会は中止。皆足早に帰りを急いでいる。私は母に何があったのか尋ねても、母は何も言わず、足早に帰りを急いでいる。もう一度、何があったのか聞きただすと、母は村の男性に召集令状が来たとのこと。

（※九会小学校沿革史には、7月27日に納涼音楽会が開催されたが、途中73名の動員下令があり、中止したと記されている。）

父には来ていなかった。村にあったお寺の住職さんに令状が来たとのこと。令状が来れば連出征である。いつも法衣をまとったお坊さんが軍服に身をつつみ、出征兵として行かれるそのころ、皆、日の丸の小旗を振り、「バンザイ、バンザイ」と見送ったものです。そして次から次へと召集令状が来て、行かれました。今は日中戦争と言っているが、当時、支那事変と言っていたように思います。そして、次々と日本をはなれ、支那の地に。

その頃、流行った歌、皆が歌っていた歌。

- 一 「勝って来るぞと勇ましく 誓って国を出たからは 手柄たてずにおらりょうか
天皇陛下のためならば 何の命がおしかろう」
- 二 「弾（たま）も戦車（タンク）も銃剣も しばし露営の草まくら 夢に出てきた父上に
死んで帰れと励まされ さめてにらむは敵の空」

（※おそらく、「露営の歌」作詞：藪内喜一郎 作曲：古関裕而）

そして昭和16年、大東亜戦争がはじまり、昭和20年終戦まで、私は物心ついた頃から戦争とともに歩んだ青春時代、私は報国隊、挺身隊と、二度国の命を受け、働きに行くことに。

今は加西市となりましたが、当時、加西郡九会村〇〇部落と言っていました。報国隊は九会村から11、12人、加古川の日毛加古川工場でした。1月15日から3か月の契約で働きに行きました。

1月15日といえば、一年でも一番寒い時期なのに、加古川工場では夜も昼も暖房一つない生活。最初は、夜は寒くて眠れませんでした。仕事は交代制で、早出は朝5時でも何一つ暖房なく、仕事は寒い地で働く兵隊さんの軍服になるのか、細い毛糸の糸繰り。糸が切れて切れて、糸つなぎに忙しい仕事でした。そして食事といえば、大根の葉の干し菜に米粒の少し入った雑炊、いつもお腹をすかせていました。報国隊の思い出は寒さ、ひもじさの思い出ばかりです。

そして契約の日も明け、2か月後、今度は挺身隊の命を受け、家から通える北条中右ミシン工場へ、これも11、12人だったと思います。最初に布の穴かがりをさせられました。仕事の配置決めだったらしく、中野の友達と二人はミシンに決まりました。裁断、アイロンかけと分かれました。私は軍服を一生懸命縫っていました。

その頃はいつも空襲警報におびえていました。警報のサイレンが鳴る度、田の畔を走り、西の山に逃げました。敵機はB29と言っていたと思います。北条の町を低空で旋回、爆弾を落とすのではとひやひやししながら、体をかたくして見ていました。でも、そのまま飛び去りやれやれと胸をなでおろし、工場へと。

ある日、私たちの帰るひと汽車前の汽車が不通となり、太平洋戦争末期の昭和20年3月31日、北条鉄道で列車転覆事故。この事故で12人が死亡、62人が重軽傷。事故は鶉野飛行場の戦闘機が試験飛行中の不時着で線路の変形した事が原因とされ、直後に通過した列車が転覆したのだ。

汽車は不通となり、飛行場ができて九会のほうへ帰る道がわからない。戦争中で家々の外灯は真っ暗だ。家に連絡しようにも、今のように家々に電話があるわけもなく、自家用車があるわけもなく、自分たちで相談して線路伝いに帰ることになる。でもその頃戦争中は、靴などなく下駄だった。いつもガタンゴツンのゆっくり走る汽車も北条までは瞬く間だ。でも線路の上を下駄で歩いて帰る線路の長さ、北条駅から長、播磨下里、法華口、田原、網引と寒い中、防空頭巾にモンペ、下駄。播磨下里で一休みする。北条から網引までに小さい小川が二つあり、川を渡るとき、暗い中にも小川の水は線路の板の間から光って見える。そろりそろりと這ってわたりました。

報国隊から帰り、すぐ挺身隊として北条まで。何もない時代、食べ物も物資も本当に不自由な時代。「欲しがりません、勝つまでは」と皆、国の為と頑張っていた遠い昔を思い出しています。